

「あのときを忘れない」

令和2年9月11日(金)
文責 佐々木 律 夫

あの日から9年6ヶ月

東日本大震災から9年6ヶ月となりました。今日の岩手日報の記事に、東日本大震災の特集記事が掲載されていました。今日の記事に掲載されていた方は大槌町の三浦さんという方です。三浦さんは東日本大震災で母、妻、長女、次女、孫の5人を失いました。助かったのは三浦さんと長男だけでした。実は私は三浦さんの長女の担任をしていました。妹は私が当時顧問をしていた陸上部に所属していました。

東日本大震災の前年のことです。長女から私に連絡がありました。「先生、今度出産のため大槌に帰ります！」長女は東京で結婚していました。無事に出産を終え、しばらく大槌にいと連絡がありました。

そして、3月11日がやってきてしまいました。私は出産してから1ヶ月以上が経っていたので「東京に戻っていてくれ」と願いました。当時は「〇〇さん大丈夫だったか？」というような、家族や親類の安否を尋ねることはしない雰囲気になっていました。私は長女に何度かメールをしましたが返事が返ってくることはありませんでした。

東日本大震災から1ヶ月程経った頃、長男から電話がありました。私が大槌中学校から花巻市の学校に異動になったとき、長女と次女とお母さんの3人で私が勤務していた学校によってくれました。帰りに4人で写真を撮りました。その時撮った写真が津波で流された家から出てきたというのです。長男は「先生に報告しなければと思い電話しました」と言っていました。長男は電話口でずっと泣いていました。かける言葉は見つかりませんでした。

次女は大学生になっていました。後で聞いた話ですが、3月12日に帰る予定にしていたと聞きました。



9年6ヶ月という時間は経ちましたがその悲しみが癒えることはないのだと思います。そのようなことを思い出しながら新聞記事を読んでいました。

新聞には県警の捜査で身元不明だった遺骨が三浦さんの妻のものだと断定され、遺骨の引き取りを決めたと書いてありました。この遺骨ですが、実は2019年の12月に見つかっていました。あごの骨格や鼻筋などの特徴が一致していたので、三浦さんの妻ではないかという結果でした。しかし、震災後の火災で遺体の損傷が激しく、DNA型鑑定は未実施でした。三浦さんは確証がないので遺骨の引き取りを保留していたのです。三浦さんは火災後、火葬もされた遺骨のDNA鑑定は不可能とされ、全国の研究機関に断られ続けてきました。諦めかけたとき、岩手医大が鑑定を承諾してくれました。結果はDNAが検出されず「鑑定不能」となりました。三浦さんはその結果を静かに受け止めました。

三浦さんはDNA鑑定が行えず「本当に妻なのか正直分からない」と打ち明けています。しかし、DNAが全てではないし、県警の地道な捜査を信じる思いも強くなり「万一違っていても、誰かが引き取らないとかわいそうだ」として、長男と相談して引き取ることを決断したと言っています。今月中に引き取り、10月22日の妻の誕生日に納骨するようです。妻と母は見つかったようですが、2人の娘と孫は行方不明のままです。三浦さんは「海に帰ったのかな」と思えるようになってきたと言います。そして、「長男夫婦と3人の孫に支えられて生きてきた、あの子たちの笑顔が命をつないだ」と感じています。

大槌町は県内最多の417人が行方不明となりました。東日本大震災で肉親を失い、その面影を探し続ける人たちはまだまだたくさんいます。そして多くの方々は自分の気持ちと常に向き合う日々を送っているのだと思います。私たちは9年6ヶ月が経った今でも悩み、葛藤し、問い続けている人たちがいることを忘れてはいけません。

大槌町は県内最多の417人が行方不明となりました。東日本大震災で肉親を失い、その面影を探し続ける人たちはまだまだたくさんいます。そして多くの方々は自分の気持ちと常に向き合う日々を送っているのだと思います。私たちは9年6ヶ月が経った今でも悩み、葛藤し、問い続けている人たちがいることを忘れてはいけません。